

在京浅川会の活動を

当面の間休止します

皆様には、いかがお過ごしでしょうか。昨年は新型コロナウイルス感染症の流行により、生活様式が一変し、何かと不自由な生活を強いられているのではないのでしょうか。新年を迎えた今日もなお、主要な都府県に緊急事態宣言が出され、感染者数も全国的に高止まりの状況です。

残念ながら昨年引き続き、在京浅川会の活動も、当面の間、休止せざるを得ません。一日も早い終息を願いつつ、会員皆様の一層のご自愛を祈念いたしております。

在京浅川会会長 関根 一男

季節のうた(第五十一回)

小針 光(八千代市)

足立たば北インヂヤのヒマラヤの

エヴェレストなる雪食はましを

正岡子規

「解説」明治三十一年の「足立たば」七首は、すべて「足立たば」で始まり、病気でなければ行ってみたい場所が挙げられている。この歌は、その中でもっとも

意外性がある。かたかなの名詞をつないでいくことは運びが非常に大胆である。病の苦しさを、明るくユーモラスに歌っており、子規の精神の強さを感じさせる。(『三省堂名歌・名句辞典』)

「補説」この歌の「北インヂヤ」は「北インド」。地理的には「ネパール」。この時代にエヴェレストは、「世界最高峰」の知識はあったようだ。この時期の子規は、「病床六尺が我が世界である。」と後に随筆に書く歩行困難の病人であった。なお、掲句以外の行って見たい場所は、「富士の頂上」、台湾の最高峰「新高山」(日清戦争後台湾は日本に割譲され、富士山より高峰)、中国の「黄河」の渡河などがある。

《作者正岡子規の略歴》

明治三十三年(一九〇〇)三十三才。一月「子規庵歌会」開催、参加者伊藤左千夫ほか十三名。「叙事文」を『日本新聞』に連載、写生文を提唱。「文章に山がなければならぬ」とする「山会」という文章会を子規庵に開く。八月二十三日英国留学の漱石離別の来訪。子規の病状はこの頃から悪化し始める。十二月、子規の有名な横顔の写真を、子規庵に近い写真館が来て撮影。

明治三十四年、一月から七月まで随筆「墨汁一滴」を『日本新聞』に連載。五月英国留学の漱石から子規を心から喜ばした「ロンドン消息」の手紙届く。この手紙は『ホトトギス』に連載。九月から日記『仰臥漫録(ぎょうがまんろく)』を書き

始める。病は日ごとに悪化、水彩画の写生で痛みを紛らす。十一月六日、ロンドンの漱石へ最後の手紙を書く。「僕ハトテモ君ニ再会スルコトハ出来ヌと思フ。……実ハ生キテキルノガ苦シイノダ」とある。十一月二十日より三十日まで「命のあまり」を『日本新聞』に掲載。

明治三十五年、三十五才。子規の病状はほとんど危篤状態となり門人達が輪番で看護に当たる。原稿は口述筆記、五月五日から九月十七日にかけて、最後の随筆「病床六尺」を『日本新聞』に連載。九月十八日午前十一時、病床に仰臥しつつ、やせた手で気力の絶唱の辞世の糸瓜(へちま)三句を記す。十九日午前一時、三十四才十一ヶ月子規はひっそりと息を引き取った。その朝、遺体を整えるため肩を抱いて子規を起した母は、「サア、もう一度痛いというてお見」と強い口調で話しかけたという。

戒名は子規居士。東京都郊外田端「大竜寺」に葬られた。会葬者百五十人。ロンドンにて子規の死を知らされた漱石は、次の追悼句を送った。「筒袖(つつそで)は自らの背広姿をいつたもの。筒袖や秋の柩にしたがはず

ともあれ、子規はその短い生涯において、俳句、短歌を近代の詩とし再生させる一方、写生文の実践を通して、今日の文章体のひとつの原型を作り出した。子規が後世に残した大きな文学の仕事であった。(参考『子規とその時代』坪内稔典他)

《余談》「野球・ノボール」訳語者子規正岡子規が野球を、俳句、短歌又は随筆に書いてその普及に貢献し、又ベースボールの用語の訳語の「打者」、「走者」、「直球」、「死球」などは現在使われている功績から平成十四年に野球殿堂入りをした。

その子規は二十代ごろ現東大の学生時代、左利の名キャッチャーで、身長一五五センチ(平均身長一五〇センチ)のユニホーム姿を『新潮日本アルバム』に掲載されている記事を読んだ。

又子規門人の書いた子規の回想には、「ベースボール」を訳して「野球」と書いたのは子規が「嚆矢(こうし)であった。それは本名の「升(のぼる)をもじった野球(ノボール)の意味であった。」とある。が、現在この説は、子規は確かに雅号として「野球」を用いているが、訳語は別人とされている。

明治二十九年の随筆『松羅(しょうら)玉液』で「ベースボール」の野球のルール、訳語などの子規の文章は、日本でもっとも早い野球文献とされている。

野球選手でもあった子規に次の歌がある。若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如(し)く者あらじ

今やかの三つのベース人満ちてそぞろに胸に打ち騒ぐかな

(注)さはにー多く。如く者あらじー及ぶものなし。そぞろー心ここにないさま
参考文献『正岡子規・久保田正文著』他)